

2-3. 舞鶴市の歴史文化の特徴

(1) 舞鶴市の歴史文化の特徴の捉え方

ア. 歴史文化遺産の概念整理からみた特徴

舞鶴市の歴史文化遺産は、指定等文化財に代表される、「市を特色付ける歴史文化遺産」と、市内各地域の個性を表す「地域を特色付ける歴史文化遺産」の大きく2つに分けることができる。

「市を特色付ける歴史文化遺産」は、市内外の人々が舞鶴市の歴史や文化の特色を知る手掛かりとなるものであり、丹後地方や京都府、ひいてはわが国の歴史や文化のなかでも価値付けられる歴史文化遺産である。具体的には、ユネスコ世界記憶遺産である「舞鶴引揚記念館収蔵品」、日本遺産構成文化財である舞鶴赤れんがパーク1号棟～5号棟(舞鶴旧鎮守府倉庫施設魚形水雷庫・予備艦兵器庫・弾丸庫並小銃庫・雑器庫並預兵器庫・第三水雷庫)をはじめとした旧鎮守府関連施設のほか、室町時代の金剛院塔婆(三重塔)や江戸時代の行永家住宅、天然記念物のオオミズナギドリ繁殖地などの歴史文化遺産などが該当する。

一方、「地域を特色付ける歴史文化遺産」は、未指定の文化財も含め、地域ごとの個性や旧村のまとまりなどの歴史や文化を感じられる豊かな居住環境を創り出している歴史文化遺産であり、各地域の社寺やそこでおこなわれる祭り・行事、地域の人々によって献花・管理される地蔵、また地域で受け継がれる食文化や説話・伝承などの歴史文化遺産が該当する。

右図に示すように、地域を特色付ける多くの歴史文化遺産が市内に継承されているとともに、それらが市を特色付ける歴史文化遺産であり、特に重要なものが指定等文化財として保存活用されている。

そのため、指定等文化財も含めて「地域歴史文化遺産」として、地域が主体となった保存・活用の取り組みの一層の推進が必要である。この意味からすると、舞鶴市は、指定等文化財と地域で育まれてきた歴史文化遺産が一体となった“個性豊かな地域の集合体”であるといえる。

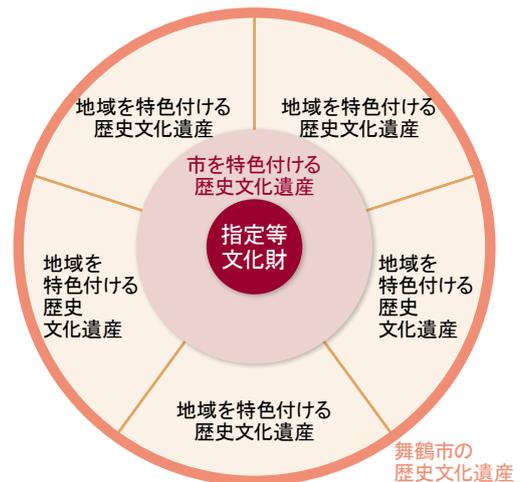


図2-56 舞鶴市の歴史文化遺産の構成

イ. 歴史文化遺産からみた舞鶴市の特徴

「市を特色付ける歴史文化遺産」と「地域を特色付ける歴史文化遺産」の相互関係は、次図に示すように、「市を特色付ける歴史文化遺産」を核とし、そこから多種多様な「地域を特色付ける歴史文化遺産」が関連・展開していく構造として位置付けることができる。このため、本構想においては、市内外の人々が舞鶴市の歴史文化に親しみ、理解できるよう、「市を特色付ける歴史文化遺産」から、舞鶴市の歴史文化の特徴を整理する。

「市を特色付ける歴史文化遺産」のうち、主要な歴史文化遺産を歴史と自然に分け、歴史を建築物や石造物、

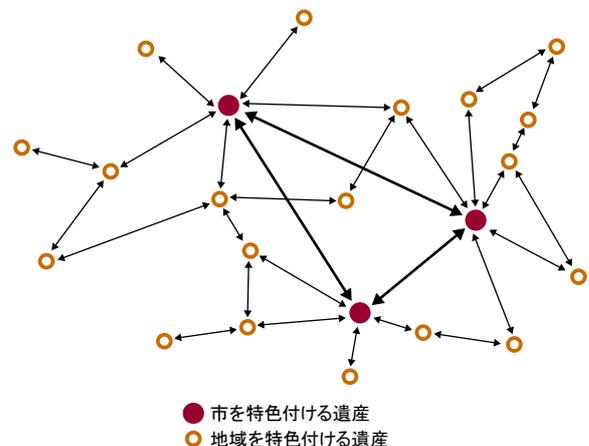


図2-57 「市を特色付ける歴史文化遺産」と「地域を特色付ける歴史文化遺産」の相互関係

遺跡などの「もの」、古くからの営み(祭りや行事、生業、食文化等)や新たな取り組みなどの「こと」、史実や説話・伝承などの「きおく」の3つの区分に従い表2-4に示す。

表 2-4 舞鶴市を特色付ける歴史文化遺産（うち、主要な歴史文化遺産）

		もの 建築物や石造物・遺跡など	こと 古くからの営みや祭礼・食文化など	きおく 史実・伝説・伝承など
歴史	先史	<ul style="list-style-type: none"> 浦入遺跡(縄文 丸木舟) 桑飼下遺跡(縄文 集落跡) 	<ul style="list-style-type: none"> 松尾寺の仏舞 	<ul style="list-style-type: none"> 信仰の島 冠島
	古代・中世	<ul style="list-style-type: none"> 大波・奥原古墳群(古墳後期) 浦入遺跡(古墳後期～平安 製塩・鍛冶) 三浜丸山古墳群・三浜遺跡(古墳時代後期～平安 製塩) 倉谷遺跡(飛鳥～平安 集落跡) 天台南谷遺跡(平安～鎌倉 経塚・古墓) 絹本著本普賢延命像他(松尾寺)(平安) 絹本著本法華曼荼羅図他(松尾寺)(平安) 阿弥陀如来坐像他(圓隆寺)(平安) 金剛院塔婆(三重塔)(室町) 木造毘沙門天立像他(興禅寺)(平安) 	<ul style="list-style-type: none"> 田中の三番叟・姫三社・徳若万歳(鈴鹿神社) 朝代神社祭礼と芸屋台他 蒲江の振物・踊り太鼓(山王神社・愛宕権現) 吉原の太刀振(朝代神社) 城屋の揚松明(雨引神社) 地頭太鼓・大俣太鼓(西飼神社) 	<ul style="list-style-type: none"> 薬師信仰 長雲寺の湯薬師伝説 葛島伝説 安寿と厨子王 蛇に関わる伝説：池姫さま・城屋の揚松明(大蛇退治)・蛇ヶ池
	近世	<ul style="list-style-type: none"> 松尾寺本堂・経堂・仁王門(江戸) 田口神社本殿・拝殿(江戸) 金剛院庭園(安土桃山)・本堂(江戸) 圓隆寺本堂・多宝塔・鐘楼他(江戸) 大川神社本殿・拝殿・中門(江戸) 朝代神社本殿(江戸) 田辺(舞鶴)城趾(江戸) 荒木家住宅(江戸) 行永家住宅(江戸) 上野家庭園・主屋・長屋他(江戸) 	<ul style="list-style-type: none"> 吉原の万灯籠 小橋の精霊船行事 湊十二神社 神崎の扇踊 小倉のお松行事 奉納和船(湊十二神社等) 瀬崎の人形浄瑠璃 	<ul style="list-style-type: none"> 年取島伝説 大江山の鬼伝説(地頭太鼓・大俣太鼓)
	近現代	<ul style="list-style-type: none"> 舞鶴旧鎮守府水道施設(明治) 舞鶴旧鎮守府倉庫施設(明治) 旧岡田橋(明治) 吉原・成生などの漁村集落 	<ul style="list-style-type: none"> 海軍カレー・肉じゃが ばら寿司 蒲鉾 	<ul style="list-style-type: none"> 舞鶴引揚記念館収蔵資料群
自然	<ul style="list-style-type: none"> オオミズナギドリ繁殖地 ウミネコ・ヒメクロウミツバメ繁殖地 青葉山のオオキンレイカ ビカリア等化石 			

舞鶴市は海との関わりを強くもってきたことが特徴となる都市である。海からはじまり、海へとつながる舞鶴市の個性と、市を特色付ける歴史文化遺産より、舞鶴市の歴史文化の特徴をとして次の6つがあげられる。

● 多様な自然に育まれた歴史文化

リアス式海岸特有の深く入り組んだ海岸線をもつ舞鶴湾、オオミズナギドリ繁殖地である冠島、ウミネコやレッドデータブックに記載されている希少鳥類の繁殖地である杓島、オオキンレイカ等の希少植物の生育する美しい山容を見せる青葉山など太古の海からつながる舞鶴帯に起因する山や谷の環境に適応した多様性の高い自然が育んできた歴史文化。

● 人と海との関わりが息づく歴史文化

縄文時代の日本海に漕ぎ出した浦入遺跡の丸木舟、日本海と瀬戸内海をつなぐ由良川-加古川への道に位置する弥生時代の船着場のある志高遺跡、大浦半島の浦入遺跡、70基を越える大波・奥原古墳群など、海を渡ってきた大陸からの先進的な文化交流を根底にもち、現在も吉原よしわらや成生などの特徴的な漁村景観とそれぞれの集落で営まれ続ける伝統芸能の吉原の万灯籠まんどろ、雄島おしままいり、小橋おぼせの精霊船行事しょうらいぶね、海産物や蒲鉾生産など、古代から近代さらに現代へと続く村々が豊かな海の恵みを余すことなく活かし、拓いてきた歴史文化。

● 山と里の信仰と交流が培った歴史文化

丹後地方唯一の国宝絵画の普賢延命像ふげんえんめいなどを所蔵する松尾寺や重要文化財である三重塔が存在感を見せる金剛院、田口神社や朝代神社をはじめとする各地域に残る寺社建築、そこで繰り広げられる仏事や祭礼芸能、さらには、各集落の神社の祭り、地藏盆、虫送り、辻堂での交流、里の豊かな農産物や祭礼の際に食されるばら寿司など山と里の信仰と祭りを今日に伝えてきた歴史文化。

● 近世城下町によって形づくられた歴史文化

海に面した城下町としての歴史を伝え、関ヶ原の戦い前哨戦である田辺籠城戦の舞台となった田辺城、北前船の寄港地として発展をとげた高野川沿いの商家群、芸屋台などの町人文化など、近世の陸と海の交流から生まれ、花開いた歴史文化。

● 海軍鎮守府開庁により築かれた歴史文化

旧海軍舞鶴鎮守府開庁を契機に造られた日本遺産の構成文化財である赤れんが造りの舞鶴旧鎮守府倉庫施設などの建造物、物資や人を運んできた北吸トンネルに代表される官設鉄道施設、近代水道技術を導入した水道施設、人口増加に備えて整備された中・東地区の新市街地など、舞鶴市の近代を支え、現代まで継承されてきた建造物や技術、「肉じゃが」をはじめとした新しい食文化が織り成す歴史文化。

● 引揚者を迎え入れた歴史文化

第2次世界大戦終結後、海外に残された多くの日本人が日本へ引き揚げてきた。引揚者を受け入れる港は全国にあったが、昭和20年(1945)から昭和33年(1958)までの13年間にわたり引揚者を迎え入れたのは舞鶴だけであり、大陸で苦労を重ねた同胞を温かく迎え入れ、自分たちができる限りのおもてなしをおこなった歴史文化。

(2) 舞鶴市の歴史文化の特徴の整理

舞鶴市の歴史文化を構成する6つのテーマを踏まえると、舞鶴市の歴史文化の特徴は次のように整理することができる。

～ 舞鶴市の歴史文化の特徴 ～

舞鶴市の歴史文化は、地質時代からの活発な火山活動などが生み出した豊かな自然のもとに育まれた美しいリアス式海岸や青葉山などの山々、大陸や日本海沿いの地との交流の証を伝える遺跡、そして、人々の深い信仰のもとに培われてきた数多くの絵画や彫刻、さらに近世幕藩体制のなかで発展してきた城下町の文化や技術など、長い時間をかけて人々に守り、育てられてきた歴史文化と近代に鎮守府として新しい都市の創造と最新の技術によって発展した歴史文化がふたつの極となり、舞鶴は複数の核をもつ複眼都市として発展してきた。

今も吉原の万灯籠をはじめ、各集落に受け継がれる伝統的な祭り・行事、生業や食文化、「安寿と厨子王」をはじめとした説話や伝承などの地域の個性豊かな歴史文化の一つひとつが花のように地域で咲き続け、歩み続け、今に辿り着く

“海とともに生き、海に祈り、海とともに発展した海洋の歴史文化”

といえる。



ウミネコ繁殖地沓島



浦入遺跡



青葉山



金剛院の紅葉



田辺城資料館



高野川倉庫群



赤れんが倉庫群



北吸配水池



吉原の万灯籠

2-4. 舞鶴市における歴史文化を活かしたまちづくりの取り組み経緯

舞鶴市におけるこれまでの歴史文化を活かしたまちづくりの取り組み経緯について、「(1)歴史文化の保存等に係る取り組み」、「(2)歴史文化の価値の発信に係る取り組み」、「(3)担い手育成や意識啓発・学習に係る取り組み」、「(4)歴史文化の活用に係る取り組み」の4つに区分して概観する。

(1) 歴史文化の保存等に係る取り組み

ア. まちづくり団体による保存等の活動

舞鶴市は城下町や赤れんが倉庫群をはじめとする本市の近代化の歴史・文化、地域資源等を最大限に活用し、調和のとれたまちづくりを推進するため、様々な構想を策定し、まちづくり団体とともに実施してきた。

舞鶴西地区では、城下町倶楽部が平成4年(1992)竣工の田辺城門の建設を契機とし、地元自治会や商店街の有志によって結成された。毎年「田辺城まつり」や「ちゃったまつり」等の各種イベントでの企画、「田辺城のかがり火」点灯による城の雰囲気づくり、地元に残る寺社仏閣や史跡などから「舞鶴百撰」を選定して看板等の設置をおこない、観光客や地元住民への啓発活動をおこなうなど、田辺城と城下町を中心に西地区の歴史文化遺産の掘り起こしと地域活性化の活動をおこなってきた。

一方、東地区では、赤煉瓦倶楽部舞鶴が平成3年(1991)に市内に残る赤煉瓦倉庫群を調査・活用しまちづくりに活かすことを目的として、市民や市職員の有志をメンバーとして結成された。以降、市内の赤煉瓦建造物を調査するとともにPRや活用事業を進めている。平成3年(1991)からは市役所西隣の赤れんが倉庫群でのJAZZイベントやライトアップを開催するなどの活動をおこなっている。また、国内で5基目(現存4基)となる神崎^{かんざき}ホフマン式^{りんよう}輪窯(以下ホフマン窯)を発見し保存活動を繰り広げるなどの保全活動もおこなった。

以上のように東・西地区の特色ある歴史文化遺産を活用する「まちづくり団体」が活動したことにより、市民へも認識が広がり、現在のまちづくりの骨子が形成された。

イ. 保存修復の取り組み

舞鶴市では平成3年(1991)から市役所に隣接する赤れんが倉庫群の活用を推進し、平成5年(1993)には赤れんが博物館、平成6年(1994)には市政記念館、平成19年(2007)にはまいづる智恵蔵、そして平成24年(2012)には赤れんがパークとして赤れんが倉庫群一帯と赤れんが工房(赤れんが4号棟)・赤れんがイベントホール(赤れんが5号棟)が順次整備され、多くの市民や観光客に利用されている。また、由良川河口にあるホフマン窯は海軍へ供給する「れんが」を焼く窯として建築されたが、全国



図2-58 神崎煉瓦ホフマン式輪窯

で4基のみが現存する貴重な建造物である。赤煉瓦倶楽部舞鶴による保存活動の後、公益財団法人舞鶴文化教育財団が所有することとなった。財団によって窯の保存修復が進められ、シンボルであった大煙突やその他の煙突も崩落の恐れがあることから、上部を切断したうえで地上に降ろし後の整備のため保存されている。今後、見学者の受け入れなどの活用に向けた検討が進められている。

一方、城下町であった西地区の市街地では、当時の町の繁栄を示す朝代神社の祭礼で子供歌舞伎に使用された芸屋台が残されている。これらを市の有形民俗文化財に指定するとともに市の支援を受けながら芸屋台を組んだまま保存・展示する施設の整備が進められている。現在、10基のうち新・西・魚屋・丹波・竹屋・寺内・堀上の7基が市の文化財指定を受けJR西舞鶴駅や舞鶴公園をはじめ各自治会の保存施設に収納され、当時の町の隆盛と賑わいを感じることができる。

ウ. 技術伝承

舞鶴市では、「技を紹介、夢を発信」をテーマに、市内で活躍している“匠”と市長との対談を通じて、“匠”の技、作業の様子をホームページ等で紹介している。現在、第1回から第5回までが公開されており、手作りかまぼこにこだわり、舞鶴で唯一、江戸時代から続く細工かまぼこ（祝儀用の飾りかまぼこ）を製造している藤六（竹屋）や舞鶴茶生産組合では組合長が京都府農山漁村伝承技能者として後継者の指導にあたり技術伝承の重要性を発信している。

また、京都府農山漁村伝承技能者としては、万願寺甘とうや神崎落花生の栽培技術を後継者へ伝承したり、森林組合の女性作業班員では「つづら藤」でふじづる加工を広く広めたり、定置網の漁労技術を継承発展させるなどの取り組みがある。



図 2-59 舞鶴茶



図 2-60 細工かまぼこ



図 2-61 万願寺甘とう

エ. 伝統行事保存の活動

市内には各地域に先人から受け継いできた数多くの伝統行事や祭礼芸能等が残っている。これらを次世代へ継承するため保存に取り組む団体が数多くみられる。京都府登録無形民俗文化財である「吉原の太刀振」は、東吉原のみの行事であったが、少子高齢化の進行により運営を継続することが困難になり、昔太刀振を経験したメンバーがつくる「吉原太刀振保存会」によって運営されている。このほか、5月8日に松尾寺でおこなわれる「松尾寺の仏舞」（卯月八日＝旧暦4月8日の法要）は国の重要無形民俗文化財にも指定されている。6月1日に冠島に上陸して漁民の信仰が厚い老人嶋神社に参拝する「雄島まいり」、盆行事として8月14日には高さ16メートルの大松明に小松明を投げ入れる勇壮な祭りで、府登録・市指定文化財である「城屋の揚松明」、15日には祖先の霊を海の向こうへ送る「小橋の精霊船行事」、16日には魚形に組んだ灯籠を伊佐津川の中で回転させる「吉原の万灯籠」をはじめとする数多くの伝統行事が地元住民や団体によって、継承されている。

（2）歴史文化の価値の発信に係る取り組み

舞鶴市では、指定等文化財の各種調査を継続的に進めてきたが、これらの調査結果を活用して、その価値や重要性ならびに魅力を発信する取り組みが進められている。

舞鶴市指定文化財「糸井文庫」は、糸井仙之助^{せんのかげ}が収集した、丹後地方に関連のある書籍、古文書等約2200点におよぶ江戸時代から昭和初期の郷土資料であり、伝説や伝記、旅行記、絵図など多岐にわたっている。特に、酒呑童子^{しゅてんどうじ}、浦島太郎^{うらしまつたろう}、三庄太夫^{さんしょうだゆう}など伝説上の人物に関する書籍、記録、錦絵、玩具等の総合的蒐集^{しゅうしゅう}にかけては、全国的にも匹敵するものがない地域性豊かなコレクションである。これらの資料を平成14年(2002)から立命館大学アート・リサーチセンターと共同研究をおこない、同大学のWEB上で世界に情報発信している。浦島太郎や石川五右衛門^{ごえもん}を描いた錦絵はテレビや書籍等のメディアでも頻繁に取り上げられている。

その他にも、第2次世界大戦後、舞鶴港は大陸に残された人々を迎え入れる港として、昭和20年(1945)から同33年(1958)まで国内で唯一13年間にわたり、約66万人の引揚者と約1万6000柱の遺骨を迎え入れた引き揚げの地である。戦後70年以上経ち、戦争を知らない世代の増加とともに、引き揚げの史実は過去の出来事として、年々薄れつつある。こうした引き揚げの史実を末永く後世に継承し、また平和の尊さを発信していくため、舞鶴引揚記念館が収蔵する引き揚げやシベリア抑留に関する資料「舞鶴への生還1945-1956シベリア抑留等日本人の本国への引き揚げの記録」は平成27年(2015)10月10日に「ユネスコ世界記憶遺産」として登録された。

さらに、平成28年(2016)4月には、横須賀、呉、佐世保とともに、「日本近代化の躍動を体感できるまち」をテーマに、「静かな農漁村に人と先端技術が集まり、独自の都市形成の歩みの中で軍港都市が誕生し、日本の近代技術が生まれ、日本の近代化を推し進めた。四市には、海軍由来の食文化もまちに浸透し、多種多様な数多くの近代化遺産とともに、躍動した往時の姿を体感できる」をストーリーとして、日本遺産に認定された。

このように、市の内外にその魅力を発信するとともに、市民に対して舞鶴市の歴史文化の価値の浸透などを目的として、各種出版物を発行している。

市内に所在する舞鶴の特徴のひとつである近代化遺産を掲載した『舞鶴の近代化遺産』を平成13年(2001)に、民家を集成し掲載した『舞鶴の民家』を平成15年(2003)に刊行した。また『舞鶴のあゆみ改訂版』を平成25年(2013)に刊行。国・府・市の指定・登録等の文化財180件を掲載した『舞鶴の文化財』を平成26年(2014)に、舞鶴に関する絵地図を集成した『舞鶴の絵地図』を平成29年(2017)に刊行した。これらの冊子は市役所市政情報コーナーほか、赤れんが博物館・郷土資料館・田辺城資料館等で広く頒布している。



図2-62 『舞鶴の文化財』

このほかにも、舞鶴の動植物や景観を紹介する『舞鶴の守りたい自然』を平成20年(2008)、『舞鶴ワールドミュージアム』を平成27年(2015)に刊行したほか、平成23年(2011)には田辺城の築城と城下町の礎^{ほそかわゆうさい}を築いた細川幽齋^{ほそかわゆうさい}を顕彰した『細川幽齋と舞鶴』、平成27年(2015)には引き揚げの史実を後世へ語り継ぐ『母なる港舞鶴』を刊行している。

今後も、城下町の名残が残る町並みや建造物等貴重な歴史的景観の調査研究、未活用の旧海軍遺産等についての調査研究、軍港都市の面影を残す個性ある街路・町並みや建造物等の調査研究など、舞鶴の特徴となる歴史文化遺産の価値の発信を支える様々な調査研究を進めることが重要である。

さらに、地域文化の継承と地域コミュニティの醸成に寄与する伝統行事や祭礼芸能に対して、記録映像制作、用具修繕にかかる費用に対する補助など、その継続や復活の取り組みを支援している。

(3) 担い手育成や意識啓発・学習に係る取り組み

ア. 市民活動の支援と養成講座の開催

市内の各地に残る歴史文化遺産である建造物や美術工芸品・祭礼芸能や伝統行事は舞鶴市文化財等保全補助金による支援をおこなっている。また、市民が「ふるさと舞鶴」に関心をもち、学び、我がまちの良さを再認識することで、ふるさと舞鶴を誇りに思うと同時に、舞鶴を世界中に発信することで舞鶴市をさらに活性化することを目的として、観光ガイドボランティア「けやきの会」や「田辺城ガイドの会」、「舞鶴・引揚語りの会」「赤れんが博物館友の会」などでは、歴史文化遺産を紹介している。また、次世代への担い手育成のため養成講座も開催している。

イ. 学習講座の開催

舞鶴市では、市の歴史や文化財等への理解を深めるための活動がおこなわれている。郷土資料館では企画展を開催するとともに講演会等を開催している。また、舞鶴引揚記念館においても定期的に企画展を開催するほかに、市内の全小学校6年生のふるさと学習の受け入れなど、市内外の多くの方に学習機会を提供している。赤れんが博物館、赤れんがパーク等でも展示や講演会・学習会が開催されている。他にも、市内各地区にある公民館の活動として歴史講座が開催されるほか、中央公民館では「地元学」を創出する取り組みとして「中舞鶴の歴史・くらし探検隊公開講座」。城南会館では「ふるさと池内探検隊」等があり、市民の地域資源への理解が深まる環境づくりが進められている。その他にも平成12年(2000)に発足した「舞鶴探索隊」は舞鶴市内を自分達が目的をもって学習し、見て歩く実地型の取り組みであり、現在も続いている。

ウ. 学校教育との連携

舞鶴市では、「地方教育行政の組織及び運営に関する法律」の改正にともない、教育の振興についての基本方針である教育振興大綱を平成27年(2015)8月に策定した。このなかで、育てたい子ども像を「ふるさと舞鶴を愛し夢に向かって将来を切り拓く子ども」として掲げ、ふるさと舞鶴を愛し、夢を育み夢にむかって自らの将来を切り拓き、力強く生き抜く子ども。コミュニケーション能力を有し、相手を尊重し思いやり、親や周りの人に感謝する子ども。そして、善悪の正しい判断をもち自らを律することができる「自律」と、自ら目標を定め自立していく「自立」とを備えた子どもを育成することとしている。そのなかで、「ふるさと学習の推進」を掲げ、引き揚げをはじめ特色ある歴史、文化や豊かな自然について、独自の絵本や副読本、さらには野外活動等を通して身近に学ぶことにより、また、港湾機能等の多様な役割や主要な産業などについて、インターンシップなどの体験活動を通して学ぶことにより、ふるさとを愛し、ふるさとに誇りをもつ教育の推進を図ることとし、重点項目として下記の2点を掲げている。

ふるさと学習の推進に係る重点項目

- ① 引き揚げをはじめとした特色ある歴史や文化・産業・行事・自然等を題材に、探求的な学習を9年間を見通して構想し、ふるさと舞鶴や地元地域への誇りと愛着を生み、やさしく豊かな心と平和を愛し将来を展望する力の育成
- ② 夢講演会、職場体験、市長のふるさと舞鶴講義、学習等、児童生徒の将来への夢や希望と意欲を持たせるキャリア教育との連携

(4) 歴史文化の活用に係る取り組み

ア. イベントの開催

歴史文化遺産を活用したイベントは、赤れんが倉庫群を会場に「赤れんがフェスタ」が平成6年(1994)から毎年開催され、赤れんが倉庫の特有の雰囲気の中なかでクラフトマンによる作品の販売やワークショップが繰り広げられている。また、「肉じゃが」をはじめとした舞鶴のグルメが楽しめるイベントとしても舞鶴の秋の風物詩として定着した。他にも、赤れんが倉庫群を会場として夏にはJAZZコンサートが長年にわたり開催され、京阪神を中心に多くの人々が来場し賑わいをみせた。

平成28年(2016)10月には日本遺産認定の記念イベント「旧軍港市 日本遺産WEEK」として4市(横須賀、呉、佐世保、舞鶴)の「日本遺産」構成文化財を特別に一般公開した。舞鶴市では、旧北吸浄水場配水池、旧舞鶴鎮守府軍需部倉庫、舞鶴鎮守府司令長官官舎(東郷邸)の3施設が公開された。「赤れんが配水池」と呼ばれる旧北吸浄水場配水池では、アート団体による作品発表がおこなわれ、ここにしか無い空間を活かした作品の発表展示場となった。同時に、合同会社まいづる広域観光公社が主催するツアーでは、葦谷砲台跡、ジャパンマリニューナイテッド株式会社舞鶴事業所内「舞鶴館」、神崎煉瓦ホフマン式輪窯の3施設が一般公開された。このほか、赤れんがパークでは、「赤れんが100年の鼓動」をテーマとして「赤れんがフェスタ in 舞鶴2016」が同時開催され、アート&クラフトフェアやジャズライブなどの催しがおこなわれた。このように、日本遺産の認定を記念して、構成文化財をさらに一般公開するとともに歴史文化遺産の様々な活用方法が模索されている。また、平成28年(2016)11月には、「旧軍港四市近代化遺産フォーラム」を東京で「旧軍港近代化遺産展、四市観光物産博」と同時に開催し、海軍カレー、舞鶴おでんなどをPRした。

西地区でも平成4年(1992)に田辺城門の建築を契機として5月に「田辺城まつり」が田辺城の本丸跡にある舞鶴公園を会場として現在も開催されている。この「田辺城まつり」では西地区の幼稚園や近隣の小学校児童による太鼓や「子供歌舞伎」など子どもから大人までが祭りを盛り上げている。

国の登録有形文化財「大庄屋 上野家」では展覧会、加佐地域農村体験イベントとしての神崎の落花生収穫と日本遺産ホフマン窯の見学会を開催。また、重要文化財の行永家住宅の特別公開など、地域に密着したイベントが開催されて、市民による歴史文化遺産活用の動きが進められている。さらに、舞鶴市では自治会等がおこなう文化財保全事業や次世代への継承事業を支援することによって、広く歴史文化遺産の活用を支援する取り組みが進められている。

イ. 歴史文化遺産の活用

○ 赤れんがパークを中心とした活用状況

舞鶴市の歴史文化に関わる代表的な歴史文化遺産である赤れんがパークでは、赤れんが倉庫群に関する歴史的な展示や賑わい創出に向けた取り組みとして、ビア・ワインホール、企画展、音楽・ファッションイベント、プロジェクションマッピング、ライトアップ等の事業を展開している。さらに、バザール、ライブ、ブライダル、サブカルチャーイベント等での民間利用も積極的に進めている。

さらに、赤れんがパーク西側の防衛施設は、近畿・北陸・中部圏唯一の海上自衛隊施設であり、日本海側における国防上の重要拠点であるが、週末等を中心に市内外から多くの見学者が訪れる施設(北吸棧橋、海軍記念館、東郷邸など)として、活用されている。

○ 映画・ドラマ等のロケ地としての活用

舞鶴市では「舞鶴フィルムコミッション連絡協議会」を組織化し、ロケ誘致を進めている。

ロケ地として、赤れんがパークや砲台跡などの旧軍が残した施設を中心とした区域をはじめ、松尾寺まつのおでらなどの神社、吉原の町並み、昭和時代に建設された木造の社宅、成生なりゅう・田井たい・竜宮浜りゅうぐうはまなどの漁村景観、三浜みはまに残る木造校舎の旧丸山小学校など市内各地で歴史文化遺産の活用が進められている。近年では、赤れんがパークや木造社宅などを活用した「日本の一番長い日」が平成27年(2015)に公開され、平成28年(2016)にも田井の漁村を中心に撮影された「海賊と呼ばれた男」が公開された。



図 2-63 ロケ地になった木造社宅

○ 特産品の開発とPR・販売

舞鶴市では、「肉じゃが発祥の地」として全国へ情報発信しており、各地イベントにおいてもPRをおこなっている。明治34年(1901)に舞鶴海軍鎮守府初代司令長官として舞鶴に赴任した東郷平八郎がイギリスで食べたビーフシチューの味が忘れられず部下に命じて日本の調味料でつくらせたのが肉じゃがのルーツとされ、その海軍の料理教科書である「海軍厨業管理教科書」や「海軍割烹術参考書」は舞鶴の第4術科学校に現在も残されている。肉じゃががまつり実行委員会において各イベントで肉じゃがを提供するほかレトルトの肉じゃがや「肉じゃがチップス」、「肉じゃがパン」などが開発されている。他にも海軍に関する食として、長い艦上生活で曜日感覚を失わないように現在も海上自衛隊で金曜日の昼食はカレーライスであることから、他の鎮守府があった横須賀・呉・佐世保と同様に「海軍カレー」や海軍のレシピを使った「海軍ロールケーキ」なども開発されている。また、舞鶴特産のじゃこやひらてん、佐波賀だいこんを使った「舞鶴おでん」の開発、海の恵みを活かした特産品も古くから知られる地域ブランドである「舞鶴かまぼこ」を代表にブランドか_かとして「舞鶴かに」や「丹後とり貝」などの海産物も知名度を上げており、舞鶴湾等京都府内で育ったかきを使った料理として夏は「舞鶴岩がき井」、冬は「かき井」などの特産品が開発されている。その他にも舞鶴発祥の「万願寺甘とう」なども京野菜ブランドとして全国へPRをおこなっている。



図 2-64 舞鶴が発祥の地とされる肉じゃが

2-5. 舞鶴市における歴史文化を活かしたまちづくりの課題

舞鶴市では、これまでも市民、行政、専門家、市民団体等の協働により、歴史文化を活かしたまちづくりにむけた様々な取り組みを展開してきた。

しかし、依然として、価値や魅力を見出されていない歴史文化遺産や失われてしまった歴史文化遺産も多くみられるとともに、歴史文化遺産を地域の活性化に十分に活かすきれていないことが課題となっている。

このため、舞鶴市の歴史文化を活かしたまちづくりに係る現状の課題を「保存に係る課題」、「活用に係る課題」の2つに分類し、課題の解決にむけた方策等を整理する。

(1) 歴史文化遺産の保存に係る課題

ア. 歴史文化遺産に係る調査の推進・継続

舞鶴市ではこれまでも遺跡の発掘調査や近代化遺産調査、民家調査を進め、学術調査結果を刊行物として出版してきたが、保存に取り組む前に取り壊された民家の事例が確認されるなど、歴史文化遺産としての高い価値が認められるにもかかわらず滅失の危機に瀕しているものもある。これらの歴史文化遺産を保存活用するために、歴史文化遺産を総合的に把握したうえで、価値を明確にしていくことが求められている。

本構想の策定にあたって、市内各地に残る歴史文化遺産の現状と住民の歴史文化遺産に対する思いを知るために全自治会を対象とした「地域のたからもの」アンケート調査を実施した。アンケート結果では伝統的な祭りや行事が継続されているほか、集落の「辻堂」や「阿弥陀堂」などが現在も地域で大切に活用されていることが判明した。しかし、こうした地域の歴史文化遺産が時間とともに担い手の減少などで忘れられてしまうことが危惧される。

このため、遺跡の発掘調査や辻堂を含めた民俗調査、道標などの悉皆調査、町並みや文化的景観の詳細調査などの学術調査の継続的な実施、調査の推進を通じて、新たな視点から舞鶴の歴史文化遺産を価値付けしていくことが求められる。

イ. 文化財相互の関係ならびに周辺環境と一体となった保存

舞鶴市には、国・府・市の指定等文化財などを総合すると、平成29年4月1日現在で189件の歴史文化遺産が文化財指定されている。

このように、歴史文化遺産の単体保存は着実に進められてきたが、指定等文化財相互の関係から浮び上がる舞鶴市らしい歴史や文化の表出や、建造物などの指定等文化財と未指定の民俗文化財の関係から把握される地域の特色の明確化、あるいは海と関わる遺跡などの文化財と周辺の海や山などの環境と一体となった価値の明確化については、取り組みの途上にある。

また、歴史的な町並みなどの保存にあたっては、景観部局や観光部局との連携、関係する市民団体や企業など、幅広い主体との連携が不可欠である。

このため、文化財とその周辺環境との一体的保全・景観形成のための各種施策等の推進や、市の部局間の連携・調整による文化財周辺の環境づくり、景観づくりの推進が求められる。

ウ. 歴史文化遺産の担い手育成

舞鶴市全域に分布する「地域のたからもの」は人口減少や少子高齢化を背景に、それらを維持・継承していくための担い手が減少しつつあり、こうした「地域のたからもの」の継承が課題となっている。

このため、同一や類似の「地域のたからもの」を有する地域の連携による活動を推進すること、市民・行政・関係機関等の主体間連携、幅広い活動支援の拡充等により、保存継承の仕組みづくりや人づくりを進めていくことが必要とされる。

特に次世代の歴史文化遺産継承の担い手づくりにむけて、学校教育や生涯教育を通じて、歴史文化遺産に関する価値の学習機会の提供、まち歩きなどの取り組みによる新たな担い手づくりを含め、歴史文化遺産の担い手づくりにむけた一層の取り組みの推進が求められる。

エ. 歴史文化遺産の発信

舞鶴の歴史文化遺産の蓄積を国内外に発信するための取り組みについては、ユネスコ世界記憶遺産の登録や日本遺産の認定について、ホームページでの発信や、赤れんがパークにおける様々なイベント等の開催によって、これまでも精力的に進められている。

しかし、舞鶴引揚記念館や赤れんがパークなどの市を代表する歴史文化遺産以外にも、未指定の漁村集落の景観や各地で繰り広げられる祭礼芸能・伝統行事など舞鶴市には市を特徴付ける魅力的な歴史文化遺産が数多くみられるが、それぞれの地域に残る歴史文化遺産の価値や魅力が市民に十分に理解・共有されないまま、歴史文化遺産が消えてしまうことが危惧される。

このため、舞鶴市の歴史文化遺産相互の関わりを物語として「ストーリー化」するなど、歴史文化遺産の一層の魅力の発信を強化するとともに、学校教育や生涯学習などによる市民の「学ぶ」機会の充実が求められる。

オ. 歴史文化遺産保存にむけた支援策の充実

舞鶴市では、赤れんが倉庫群の価値の発見・再認識を通じて、歴史文化遺産を市民の活動による歴史文化遺産のまちづくりへの活用が進められており、こうした取り組みは舞鶴における歴史文化遺産の保存にむけたひとつのモデルとして位置付けられる。

このため、今後も舞鶴市の歴史文化遺産保存やまちづくりへの活用に向けた市民活動が活性化するように、市民活動等の支援策のより一層の充実が求められる。

(2) 歴史文化遺産の活用に係る課題

ア. 歴史文化遺産と地域づくりへの活用

舞鶴市では赤れんが倉庫群や田辺城跡など、市を代表する歴史文化遺産が観光振興などの地域づくりに活用されている。また、旧上野家では、展覧会などの様々な催しが開催されて、地域づくりの拠点となっている。

しかし、舞鶴市全域についてみると、地域のなかで保存・継承されてきた漁業など生業に関わる技術や伝統行事など必ずしも十分に地域づくりに活用されていない歴史文化遺産もみられる。

また、海と深い関わりをもって発展してきた舞鶴市においては、海や山、川などの自然遺産は持続可能な地域基盤として、また、舞鶴の風土を構成する重要な歴史文化遺産ともいえる。

しかし、少子高齢化や担い手不足などで、空き家になった民家や遊休地となった森林・田畑もみられる。

このため、行政・専門家・市民・関係機関などの連携によって、歴史文化遺産の地域づくりへの一層の活用が求められている。特に、海や山、川などの自然遺産を持続可能な地域づくりに活かすため、特産品の開発や農林水産業の第6次産業化などの市の様々な施策や取り組みと連携しながら、自然遺産の活用を進めていくことが必要である。

イ. 歴史文化遺産の情報発信と活用

世界記憶遺産の登録や日本遺産の認定など、近年、舞鶴の歴史文化遺産を巡るトピックとなる取り組みが続いており、赤れんが博物館ならびに引揚記念館の入館者数は平成24年(2012)から平成28年(2016)にかけて約1.5倍に増加するなど、世界記憶遺産登録や日本遺産認定の効果が表れているが、一層の舞鶴市のトピックとなる歴史文化遺産に関する情報発信の強化が必要である。

また、歴史文化遺産の観光資源としての活用や歴史文化遺産を巡るルートの開発など、いまだ埋もれた歴史文化遺産の活用が十分ではない状況がみられる。

さらに、歴史文化遺産が市民の学習や意識啓発を促し、さらにはSNSやブログ、口コミで観光客を呼び込むなど新たな来訪者を呼び込むツールの多様化が必要とされる。

このため、歴史文化遺産の継続的な周知・認識・発信のための取り組みの推進、活用のためのプロモーションの推進、市民自らが歴史文化遺産に関する魅力的な情報の発信の担い手となる取り組みの推進などが必要である。

ウ. 歴史文化遺産に触れる機会や場の充実

舞鶴市の歴史文化遺産に触れる場としては郷土資料館、引揚記念館、赤れんが博物館、田辺城資料館・彰古館がある。

引揚記念館は昭和63年(1988年)に再び繰り返してはならない“引き揚げ”の史実を未来に伝え「平和の尊さ、平和への祈り」のメッセージを発信する施設として開館した。約1万6000点の貴重な資料を収蔵し、そのうちシベリア抑留と引き揚げに関する資料570点が世界記憶遺産として登録された。

また、郷土資料館は、昭和50年(1975)に市の文化財保存展示施設として市役所隣に開館し、その後2回の移転を経て、舞鶴市の特色ある歴史や文化の全体像を紹介し、市内外の来館者に舞鶴の歴史文化の魅力を再発見する起点および郷土学習の拠点とするため、平成28年(2016)7月15日に西総合会館の1階にリニューアルオープンした。

平成4年(1992)に再建された大手門2階にある田辺城資料館では、細川幽斎をはじめとした歴代城主や、城下町・田辺の歴史を紹介し、彰古館では、「糸井文庫」の錦絵資料を展示している。

平成5年(1994)に、赤れんがのまち・舞鶴を象徴する赤れんが倉庫を改修した赤れんが博物館は世界でひとつだけの「れんが」をテーマにした博物館であり、れんが建築とその背景にある多様なれんがの歴史、世界各国のれんがなどを展示している。

このように歴史文化遺産に関する資料や情報に触れる場の整備が進められているが、それらの施設相互の連携や、市民が歴史文化遺産全般の情報等を検索し、歴史文化遺産に触れる機会については、十分に整備が進んでいない。

このため、舞鶴市の多様な歴史文化遺産のデータベース化とそうした情報や資料に触れる機会や場の充実が求められる。

エ. 市外との連携

舞鶴市の歴史文化遺産は、日本海を通じた大陸との交流や、街道を通じた丹波・丹後地方や福井県域など市域を超えたつながりがかつてから活発に進められていた。しかし、現在では、海とのつながりや街道を通じたつながりや交流が忘れ去られている。このように、舞鶴市は文化の拠点をつなぐ大切な役割を担ってきた地域として、周辺地域との関わりを踏まえた広域的視点から捉える必要がある。

このため、周辺市町との連携による歴史文化遺産の活用ならびに周辺市町とのネットワーク構築の推進が必要である。